第五講　傍線部理由説明問題解法　30分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

鈴木大拙、本名・貞太郎は、１８７０年（明治３年）、金沢に生まれた。幼い頃に父を亡くし、苦労しながら勉学に励んで英語の教師となった。しかし学びへの意欲は消えず、教師を辞し東京へ出て、哲学、とりわけ仏教思想に心酔した。鎌倉の円覚寺に縁ができ、禅に親しむようになる。「大拙」という号は、僧・釈宗演からもらったものである。27歳のとき、一大決心をしてアメリカに渡った。そのまま彼の地で10年あまりを過ごし、米国文化に親しみ、英語を研鑽するかたわら、仏教思想の翻訳と自らの著作に勤しんだ。D. T. Suzuki の名は欧米の東洋思想研究者のあいだで徐々に知られるようになっていった。日本に戻ってからも世界的な講演活動や英語による執筆を旺盛に行い、禅と日本文化を世界に広めた。心理学者のユング、エーリッヒ・フロムをはじめ、世界的知性と交流を深めた。戦後になって、特に１９４９年から５９年にかけては、主にニューヨークのコロンビア大学を拠点に欧米で講義を精力的に続け、たくさんの弟子を育てた。

大拙は語っている。「自分は世界人としての日本人だと思っている」と。
粗雑のそしりを恐れず、あえて大胆に言い切ってしまえば、——もとより私は哲学者でもなく、宗教の専門家でもない。一介の生物学者にすぎない——大拙は、存在の妙を問い続けたのだと思う。なぜ私たちはここに存在しているのか？　私がここに生きているというのはいったいどういうことなのか？　これは実は［X］的な問いでもある。哲学の問いだけにとどまることがない。生物学でも同じことを探究している。なぜ生命はこうしてここにあるのか。生きているというのはいったいどういうことなのか、あるいは生命とは何か？　鈴木大拙に長年師事し、後年は大拙に付き従い助手役を務めた大拙一番の理解者、岡村美穂子さんは次のように述懐している。
《コロンビア大学での大拙先生の講義で、先生が「この世は神様が出てこられて、そして世の中を創造されたというけど、神様はそれ以前はどこにおられたんですか」って質問されたんです。「何をしておられて、どこにおられたんですか。皆さん、誰かわかった人がいたらちょっと立ち上がってください」って。もちろん誰も立ち上がれなかった。そうしたら、静かにご自分が立って、①「ここにある」とおっしゃったんです。このインパクトはすごかったです。そこには哲学者もいたし、コロンビア大学の先

生方もみんなおられました。》

大拙は、「ここにある」こと、つまり存在の妙について考えた。大拙は、存在の意味について問うにあたって、無心という概念を導入している。大拙の代表作『無心ということ』の序文には次のように書かれている。《自分の考えでは、この「無心」ということが、仏教思想の中心で、また、東洋精神文化の枢軸をなしているものなのである。》そして無心について彼はこう語っている。《今自分らがその世界に立って身辺をみわたすとしましょう。対立の世界を無視すると言ってはいかんが（略）その一つの言い現わし方を、無心ということにしておきたいと、こう思うのです。※独坐大雄峯の世界が無心の世界なのです。》

世界は、ある時点から言葉によって成り立つようになった。言葉によって軸が引かれ、切り分けられ、意味が抽出されるようになった。プラトンやソクラテスが現れ、ロゴス、つまり言葉で論理（ロジック）が組み立てられた。それが客観的とされた。②西洋社会は基本的にすべて言葉による客観的世界で成り立っている。

米国で生活していると、しばしば言葉に疲れることがある。それは英語が外国語であるという理由からだけではない。米国では沈黙は金ではない。自分が何者なのか、この問題についてどう考えるか、賛成か反対か、絶え

ず言葉でものごとを語らねばならない。しかし、客観的世界というのは、実は言葉が切り取った恣意的な図式にすぎない。いわば言葉を共有する者たちによる共同の幻想のようなものだ。つまり客観的なものこそもっとも主観的なのである。

　言葉以前の世界というものがかつてあった。プラトンやソクラテスよりもずっと前、すべてのものは互いに関係し合い、交じり合い、自他の区別も曖昧な、自然（ピュシス）があった。言葉がその自然を刈り取り、仕分けし、整地した。そのことによって世界が本来的に持っていたある種の豊かさが失われた。ピュシス（physis）とは、本来、ここにある、混沌とした、同時に③豊かさに満ちあふれた自然を指す曖昧な概念であったが、やがて言葉と論理による整理によって、生理学（physiology）や物理学（physics）へと変質を遂げていった。

　東洋世界でも同じことが言えるのではないか。初源的な仏教ではすべてのものに生命の存在を認め、それは互いに関係し合っているものとみなした。それが徐々に言葉によって、倫理や道徳、あるいは極楽と穢土（えど）といった二元論による［Y］に導かれるようになっていった。老荘思想にも、自然は本質的に混沌としたものであったにもかかわらず、そこに目と耳と鼻と口を穿（うが）ったことによって、つまり言葉による命名を行ったがゆえ

に、混沌の生命は失われてしまったとしている。

大拙の説く無心、あるいは禅の思想とは、言葉以前の世界にもう一度立ち返ろうとするものだと私は感じる。言葉を使ってものごとを計算し、言葉を使って自然を考える前の世界。興味深いことは、大拙が「無心」を英語で説明するとき、これをchildlikenessと訳していることだ。つまり子どものような心。

《※人間は考える葦である。だが、人間の偉大な仕事は彼が計算していない時、考えていない時になされる。無心（childlikeness）が永年にわたる自己忘却の修練ののちに回復されねばならぬ。》

（『鈴木大拙全集［増補新版］第35巻』）

禅の中には、言葉はつくりものだという思考がある。だから禅が言葉で語れないのは当然だ。けれども私たち人間が言葉をあやつり、言葉で考える動物である以上、なんとか言葉で語る努力をしなければならない。そこで生まれたのが禅問答や※公案のような言葉の形式だったのではないだろうか。一見、ロジカルではない。しかし真実を言い当てる間接的な方法としてそれらは編み出された。そんな風に思える。

私のたずさわる生物学の世界にもまさに符合することがある。生物学の究極の課題は、生命とは何か、という問いに答えることである。近代科学

は生命をよりミクロなレベルへと分解し、そのパーツを言葉によって命名してきた。生物学は、生命体が細胞からなることを見出し、ＤＮＡに書かれていた遺伝暗号を解読し、そのすべてを記載することに成功した。その結果、生物学者たちは、生命とは何かという問いに、どう答えることができたのか。それは「生命とは遺伝子を自己複製するシステムである」というものだった。これはこれで全く正しい。しかし一方で、奇妙な違和感が湧き起こってくる。私たちが生命を生命と認めるとき、生命の息吹を感じるとき、それは生命に自己複製能だけを見て取るからだろうか。そうではない。言葉が生命をこのように規定する以前に、生命は、あるいは自然（ピュシス）はもっと豊かなものであったはずだ。生命は、たえず流転し、変化し、柔らかく、可変的で、美しいものだ。言葉による切断が、生命の妙をすっかり捨象してしまっている。

「生命とは遺伝子を自己複製するシステムである」という機械論的生命観にどっぷりと浸(つ)かって、ひたすら細胞と遺伝子を切り分けていた私は、あるときそのような反省に目覚めた。生命を捉え直そう、科学の言葉によって定義された機械論的な自己複製のシステムではない生命観を取り戻そう、と。そこから私の探究が始まった。生命をもっとダイナミックなもの、合成と分解を繰り返しながらもバランスを絶えず更新しつづけるもの、つ

まり動的平衡として生命現象を考えたい。その究明はなお道半ばだし、科学である以上、言葉によって語ることを避けることはできないが、従来の言葉とは違う、より解像度の高い、新しい言葉で語り直したい。動的平衡を一言で言えば、生命は、変わらないために変わり続けるということ。④なんだか本当に禅問答みたいである。しかし、生命は（大きく）変わらないために（絶えず、少しずつ）変わり続けている、という意味だ。すこし言葉を補えば腑に落ちるところがあるのも公案に似ていると言えはしまいか。

（福岡伸一「Daisetz SUZUKI」より。文章を一部改変した）

※注　独坐大雄峯……この世でいちばん貴く有難いのは、自分がいま生きて、ここに座っているということだ、という意味。

人間は考える葦である……フランスの思想家パスカルの言葉で、人間は葦のようにか弱いけれども、思考するという点で偉大な生物である、という意味。

公案……禅宗で、修行者が悟りを開くために与えられる課題。

問一　空欄 X Y に入る語として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄に記せ。

X　ア　実学　イ　相対　ウ　超越
　　エ　普遍　オ　理知

Y　ア　止揚　イ　対偶　ウ　諦観
　　エ　分断　オ　歪曲

問二 傍線部①「ここにある」とあるが、大拙はなぜこのように答えたと考えられるか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄に記せ。

ア　西洋の神に関する観念を、東洋的な仏教思想の文脈でもぴたりと言い換えて表現できることを示したかったから。

イ　問いの答えになっていないような意表を突いた表現で、日本人らしい発想法の特色を伝えようと思ったから。

ウ　キリスト教で説く創造神というのは、西洋人の言葉による虚構にすぎないということを納得させたかったから。

エ　自分が今生きてここに存在することへの実感が、神の始源を考える時も大切な原点になると伝えたかったから。

オ　あらゆるものは、過去・現在の時空を越えてつながっているのだという存在の妙を感得させようと思ったから。

問三　傍線部②「西洋社会は基本的にすべて言葉による客観的世界で成り立っている」とあるが、筆者は西洋社会をどのように捉えているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄に記せ。

ア　西洋社会における客観は実は不十分であり、自然は混沌としていて言葉による論理では説明しきれないとする東洋的な認識のほうが、正しく客観的な態度である。

イ　西洋社会では、言葉による世界の切り取りが万能ではないと知りつつも、共同の約束事として、言葉で語れないこと、可視化・数値化して客観視できないことは切り捨ててきた。

ウ　西洋社会は、未知のことも含めて、論理的に説明できないものは無いという信念が築き上げたものであり、時に疲れるほど、言葉による客観化にこだわる社会である。

エ　西洋社会は、主観を排して真実を論理的に整然と説明できる科学を生み出し、今もその成果を尊んでいるので、東洋的な社会とは、考え方の基底にあるものが対照的である。

オ　西洋社会では、すべてを言葉によって意味づけ分類・整理しようとしてきたが、言葉そのものが人間の主観的な道具なので、実は客観的な社会とは言えない。

問四　傍線部③「豊かさ」とあるが、本文全体においては特にどのようなものを指していると読みとれるか。適切なものをつぎの中から二つ選び、解答欄に記せ。

ア　自他の区別なく、渾然としたつながりを感じられる世界
イ　人間の手が入らない、美しく純粋な原生自然
ウ　永続のために、たえず柔軟に変化し流動する生命
エ　未知の混沌とした現象にあふれていた時代の自然科学
オ　倫理・道徳がなくても調和が保たれる原始共同体社会

問五　傍線部④「なんだか本当に禅問答みたいである」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄に記せ。

ア　実際は言葉では説明不可能なのに、あえて新しい言葉で逆説的に語ることに挑んでいるから。

イ　一見、矛盾した言い回しでありながら、じつは真実を言い当てている表現だと思うから。

ウ　手が届きそうでなかなか届かない、解答に長い時間を要する深遠な課題に挑んでいるから。

エ　鈴木大拙の講義での発言のように、意外性により読者の新鮮な興味を惹きつける表現だと思うから。

オ　洋の東西を問わず世界的な発信をめざした鈴木大拙の業績によく似ていると思うから。

問六　つぎの各説明文が、本文の内容に照らして適切と考えられる場合はａを、不適切と考えられる場合はｂを、それぞれ解答欄に記せ。

ア　筆者がタイトルを「Daisetz SUZUKI」としたのは、鈴木大拙が日本人でありながら世界に通用する知性であったことを表したいためである。

イ　「存在の妙」を説く「無心」は鈴木大拙の独創といえる概念で、神に関する宗教概念を自然科学とも融合させて説明できる可能性を持っている。

ウ　西洋の生理学や物理学などの自然科学は、混沌とした自然（ピュシス）を否定して、整然とした自然を論理的に把握できると見ようとした出発点に誤りがあった。

エ　西洋でも東洋でも、言葉による仕分け以前は、世界は全ての存在が互いに関係し合って成り立っているという自然観があった。

オ　筆者の「動的平衡」の研究は、西洋の生物学の成果を土台に、機械論的な欠点を補うために新たな生命観の確立をめざすもので、それは禅の思想とも通い合う性格をもつ。

問七　二重傍線部「興味深いことは、大拙が「無心」を英語で説明するとき、これを childlikeness と訳していることだ。つまり子どものような心」とあるが、筆者が「子どものような心」を重視するのはなぜか。その理由を、四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問一
X
Y

問二

問三

問四

問五

問六
ア
イ
ウ
エ
オ

問七

第五講　傍線部理由説明問題解法　解答

問一

X	Y
エ	エ

問二

オ

問三

オ

問四

ア	ウ

問五

イ

問六

ア	イ	ウ	エ	オ
a	b	b	a	a

問七

「子どものような心」は大拙の「無心」も筆者の生命観も言葉以前の世界に豊かさがあることを示唆するから。